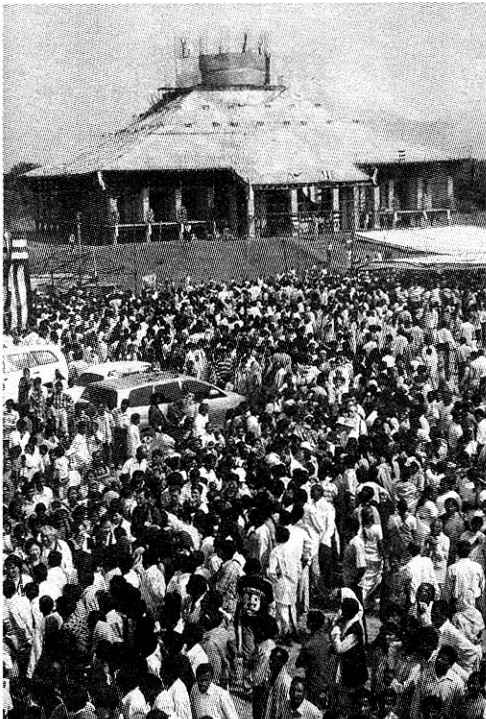


渦巻く新仏教徒の熱気

「ジャイ・ビム」(アンベドカル万歳)の雄叫びが、(こだま)し、無数の新仏教徒たちが境内に渦巻いた。インド中部ナグプールから南東八五キロの町ポリーにある天台宗禪定林で八日、大本堂の新築工事が七割以上進み、訪印した天台座主名代の森川宏映探題(毘沙門堂門跡前門主)の導師で落慶法要が営まれた。新仏教の聖地に立つ同寺は終日、大群衆の熱気と興奮に包まれた。

住職 叡山修行のマナケ氏

ナグプールは五十年一者B・R・アンベドカル(一)と数十万人の被差別前、仏教復興運動の指導 博士(二八九一—一九五) 民衆が集団改宗を果たし



禪定林大本堂を取り囲む新仏教徒の大群衆

天台宗インド禪定林 森川探題 導師に

た都市。禪定林は、比叡山延暦寺で十五年間修行した現地出身の僧侶サンガラトナ・法天・マナケ氏(四五)が住職を務める。熱く、まぶしい乾期の

「アンベドカル万歳」改宗の故地

大本堂は旧本堂が手狭になったため、宗派や各地寺院などの支援を受けて〇五年に着工した。鉄筋コンクリート造り、二層屋根の多宝塔様式で千二百人が収容できる。昨年にも雨期が長引いたりして工事が遅れている

が、落慶法要は予定通り禪定林開創二十年にあたる八日に営んだ。日本からは僧侶や檀信徒ら約二百三十人が参加した。戸外での「百味百僧四箇法要」で、濱中光礼宗務総長や清原恵光延暦寺執行ら僧侶百人以上が出仕、

一般の日本人参列者も各地の名産品を持ち寄って尊前に供えた。「南無アンベドカル菩薩」。法要の終盤、釈尊や高祖天台大師、宗祖伝教大師に続いて、博士をたたる宝号が響き渡った。

この日は、叡南寛範・



マナケ住職

日差しが照りつける禪定林境内。群衆は幾筋もの川のように合流を重ね、広場は見ると人の海と化した。法要が佳境を迎えた午後一時すぎ、参拜者の数は、関係者によると約十万人にふくれあがった。そのほとんどが「マハール」と呼ばれる被差別階層出身の仏教徒だ。会場では老若を問わず女性の姿が目立った。新仏教徒を象徴する色、青をあらわした帽子やサリーが褐色の肌によく映える。インドの人口約十一億のうち、仏教徒は一%未満とされる。ナグプールのあるマハラシュトラ州が最も多く、〇一年の同国政府の統計では約五百八十万人が暮らす。マハールはかつて動物の死骸などを処分していたカースト外の「不可触民」。一九五六年、差別に苦しむ彼らとともに、カーストと一体のヒンドゥー教から抜け出そうと改宗したのが、マハールの出身で独立インドの初代法相アンベドカル博士だった。

同じ階層のマナケ住職は博士の側近サッチタナング・マナケ氏(故人)の一人息子で、七一年、インドに滞在していた比叡山十二年籠山の僧・堀澤祖門氏(現・叡山学院長)に両親が託して来日。百日回峰などの修行を積んだ。八五年に帰国したあと禪定林を開き、孤児院や学校運営、巡回医療など福祉活動に携わってきた。

毘沙門堂門跡前門主の導師で、本尊釈迦牟尼仏の砂岩製坐像(高さ五尺)と、脇侍の伝教大師像・アンベドカル像の入仏開眼法要も行なわれた。参列した新仏教徒のロメッシュ・スレワンシさん(六九)男性は「改宗するまで人間として扱われなかった。大本堂で仏教をさらに布教してほしい」と期待を語った。マナケ住職は「インド社会を改善するため、大本堂を菩薩僧養成の道場にしたい」と抱負を話した。